

青森県立八戸水産高等学校

住所 八戸市白銀町字人形沢六

生徒数 男子三八六名 女子一〇三名

部員数 男子七名 女子一名

顧問 嶋脇 芳勝・上野 俊夫

コーチ 西川 修一

昭和四十一年度本校水産製造科卒業の常磐健司氏が発起人となり、四十八年入学の二部親貴（F科主将）、高橋（W科）、磯島・西村（E科）君達が一年生のとき、昭和四十八年四月に、八水高空手道部愛好会が発足した。

発足当時は部室や練習場所もなく、前庭の片隅で基本練習、ランニングの繰り返しでした。夜遅くまで練習し、なんとか試合に出たいという事で、高総体に参加、会場が確か深浦高校で十三校参加ではなかったかと記憶しています。試合が終わり、八戸に着いたのが十時過ぎでしたが、男子団体組手では初戦にしては、手ごたえをつかみ、新たな希望と夢をいただき、帰ってきました。

先輩各位のたゆまぬ指導と部員一人一人の努力のかいあって、翌四十九年五月、部に昇格、長い歴史の基盤を築いていただき、力強く第一歩をスタート致しました。

部予算もつけてもらえず、道衣、プロテクター、挙サポ類はすべて自費、部室や練習場所もままならない暗中模索の状態から、よくここまでこぎつけたものだとい、思い起こしても、胸にこみあげてくるものがあります。

二十年という長い歴史を振り返ってみますと、色々な事が思い起こされます。四月新入部員との蕪島までのランニング、砂浜での基礎体力作り、帰ってきて、前庭で、蹴り、突きの基本の繰り返し、手足に血マメができ、ヘドを吐くほどそれは厳しいものでした。高総体に備えての合宿、工大一、光星高校との練習試合、最初の頃は弘前、深浦地区での試合が多く、遠征になると移動が大変でした。思い出せば二十年の歴史が走馬灯のように流れていきます。

ここで、五十三年卒の主将で卒業後もよく後輩の面倒をみていただいた故佐々木喜広君が本校卒業アルバム「眺洋」に投稿した遺文（国鉄に就職したが二十六才で勤務中に列車事故で水眠）を紹介したいと思います。

「三年間、空手部の部員として、頑張ってきましたけれど、色々な事がありました。

入部した時の事、きつい練習、初めて試合に出場した時の事や試合で勝った時、負けた時、更には審査を受けた時や、始めてマネージャーが入部した事、あの真冬、雪の中をランニングした事など数えきれない思い出が数々あります。今考えてみると、あの時は苦しかった事も、今ではすべてよい思い出に変わってしまっています。入部した時の不安な気持ちも、すっかり消えて、俺にもやれたんだなあという気持ちで一杯です。

もし水産高校で何をやってきたと聞かれた時に、空手だけはやってきましたと、堂々と言えるような気がします。

最後に後輩達に一言、空手部に入部してよかったと思えるよう

につらい事、苦しい事に耐えて、これからも頑張ってもらいたい
と思います。

発足当時から四年間の戦歴を述べさせていただきます。

春季大会二位一回、三位二回

高総体 三位二回

秋季大会二位、三位各一回

その後、コーチOBも仕事が忙しくなかなか顔を出してもらえず、顧問も空手道の経験者はおらず、活動も低迷してきましたが
五年前から岬台公民館で一般の人と夜七時からの練習に参加し、
光星高本田先生、西川修一コーチには大変御世話になりました。

そして、我が校待望の空手道の経験者である中村靖明先生が、
平成二年に赴任し、翌三年には高総体ベストエイトまで導いてく
れた。これから八水高の第二期黄金期を築いてもらおうと思っ
ていた矢先、二年間で八東高に転勤。今年是一年生だけ七人で、基
本から始めています。

終わりに本校二十年目にあたり、八水高空手道の基盤を築いて
下さった先輩各位の御尽力、御苦労に対し心から敬意を表し、今
後の益々の発展を祈ります。卒業生OB各位も、公私共に多忙な
折がんばっている事と思いますが、これをひとつの節目として、
空手できたえた身体で、心身共に健康で御健勝であられますよう
お祈り致します。

末文ながら、青森県高体連空手道部会二十周年をお慶び申し上
げ、今後益々の御発展を心から御祈念申し上げ、お祝いの言葉と

致します。

平成四年六月六日

八戸水産高校 上野俊夫

